

## 河川の造った地形 ―越谷市内の河畔砂丘と自然堤防―

秦野 秀明

越谷市内で最も注目すべき地形は、河川によって造られた河畔砂丘である。自然堤防の上に造られた河畔砂丘は、北西からの季節風によって運ばれた砂の層の高まりによって認定され、蛇行する流路の袂に相当する地点の風下側（東側または南側）に出やすいことが明らかにされている。また、かつての利根川とみられる流路（流路跡）沿いのみ分布する河畔砂丘が、越谷市内では、元荒川の曲流（曲流跡）沿いに、「5つ」もあることから、元荒川はかつての利根川の本流であったとみられる。

河畔砂丘の造られた年代は不明であるが、春日部市にある浜川戸河畔砂丘の砂の層の基底近くで、平安時代の終わり頃の土器が出土し、砂の層の上で、「弘安六年（二二八三）六月」と記された板碑が出土していることが、一つの指標となる。

越谷市内で最も体積が大きい①袋山河畔砂丘は、旧袋山村の大部分を、北を凸に取り囲むように流れていた元荒川の曲流跡の上流部から中流部の東側から南側に沿って発達している。

②大林河畔砂丘は、①袋山河畔砂丘を造った元荒川の曲流跡の下流部が、旧大林村の西部を、西を凸に取り囲むように流れていた東側に沿って発達している。

③北越谷河畔砂丘は、旧大房村の南西部と旧大沢町の南西部を、現在も西を凸に取り囲むように流れている元荒川の曲流の上流部の東側に沿って発達している。

越谷市内で最も標高が高い④東越谷河畔砂丘は、旧花田村と越ヶ谷宿の北東部を、北東を凸に取り囲むように流れていた元荒川の曲流跡の下流部が、旧小林村を、西を凸に半分取り囲むように流れていた曲流跡の東側に沿って発達している。

⑤大相模河畔砂丘は、旧西方村の北東部と旧東方村の北部及び旧見田方村の北部を、現在も北を凸に取り囲むように流れている元荒川の曲流の南側に沿って発達している。

越谷市内には、河畔砂丘を造った曲流（曲流跡）以外にも、自然堤防を造った流路（流路跡）も数多くある。この自然堤防は、大きな川が繰り返して氾濫した結果として造られた地形である。

⑥北越谷河畔砂丘を造った曲流跡は、旧大房村の南西部から、押堀である旧「大沢七ツ池」に沿って、旧大沢町の西部から北東へと、後に葛西用水（逆川）の一部として再利用された流路を、現在の葛西用水（逆川）とは逆の方向に流れ、旧花田村の北から、東越谷河畔砂丘付近へと流れていた。

⑦東越谷河畔砂丘を造った曲流跡の一部は、旧小林村の南東部を経て、旧増林村の南部との境界付近で、元荒川へと合流していた。

⑧大落古利根川の支流とみられる会野川の曲流跡は、旧平方村を、西を凸に半分取り囲むように流れていた。上流部から中流部は、現春日部市との境界を画しながら、上流部から、会の川、会之堀川、沼田落し、上船川の名で、現在も流れている。

⑨大落古利根川の本流であった曲流跡は、旧増森村の北東部及び南東部と旧中島村北部で、西を凸に現吉川市との境界を画しながら、流れていた。この曲流跡の下流部は、新方川の流末として再利用され、現在も、大落古利根川の下流部となる中川に合流している。

⑩綾瀬川の本流であったとみられる五才川は、現さいたま市との境界を画しながら、旧西新井村の西部を経て、旧長島村の南西部で、綾瀬川へと合流している。さらに下流部においては、綾瀬川の本流であったとみられる曲流跡が、旧大間野村の南西部から南部にかけて、現綾瀬川に沿って数ヶ所の区間で流れていた。

⑪綾瀬川の本流であった流路跡を、再利用したとみられる新川は、末田用水の下流部として、旧越巻村の南部から旧七左衛門川の南西部を経て、旧大間野村の南東部で、綾瀬川へと合流している。

⑫綾瀬川の本流であった古綾瀬川の曲流は、旧蒲生村の南東部と旧伊原村の南部及び旧麦塚村の南西部で、現草加市との境界を画しながら、現在も曲流している。

⑬時期は不明ながら、綾瀬川の本流とみられる曲流跡が、現さいたま市の旧釣上村付近から、現国道四六三号線に沿うように、旧西新井村の北西部から北東部へと流れて、旧神明下村の北東部で元荒川へと合流していた。

⑭の曲流跡と関連して、⑭元荒川の支流とみられる曲流跡が、旧野島村の北部から末田用水に沿うように、旧荻島村の北部から南西へと流れて、旧後谷村の北東部と旧西新井村の北東部付近で、⑬綾瀬川の本流とみられる流路に合流して、旧谷中村の中央部へと分流していた。その下流部は筆者の推定ながら、⑮旧大作堀と旧とうかん堀として再利用された流路を、旧越ヶ谷宿の南西部から旧瓦曽根村の南部と旧西方村の南西部を経て、旧登戸村の南東部へと流れて、その下流部からは、現在も多くが残る「不動道」に沿うように南南東から南西へと曲流し、旧蒲生村の南西部で綾瀬川へと合流して、現草加市側へと分流して、南西方向へと流れて、現川口市内の旧江戸袋村で、利根川の本流でもあった毛長川へと合流していた。

以上のように、流路跡（曲流跡）は、その流路（曲流）が造った自然堤防の分布から、大凡、推定可能となっている。

越谷市内の河畔砂丘と自然堤防の上には、古い神社やお寺が数多く建立された。同様に、中世に建てられた板碑も、越谷市内の河畔砂丘と自然堤防の上で、数多く発見された。このことから、かつては大部分が低湿地帯であった越谷市内において、いち早く人々が住み始めた場所こそが、河畔砂丘と自然堤防の上の微高地であったということができる。

第16図「中川水系流域(中流部)における自然堤防の分布(国土地理院洪水地型分類図による)より転載・加筆

